

現代イタリアの中学校音楽科教科書にみられる 歌唱教育についての一考察

—MUSICA live (2009) の分析をとおして—

大野内 愛

(本講座大学院博士課程後期在学)

A Consideration of Singing Education in School Textbooks of Music in Italy: An Analysis of *MUSICA live* (2009)

Ai ONOUCHI

1 研究の動機と目的

現在のイタリアの中学校で使用されている音楽科教科書において扱われている学習活動には、歌唱、器楽、鑑賞、音楽理論の学習、創作・楽器製作、コンピュータ学習の6つが挙げられる。その中でも歌唱、器楽、鑑賞、音楽理論の学習の4つは、あらゆる出版社の教科書において必ず扱われている¹。筆者はこれまで、教科書で扱われているそれぞれの活動で、どのような内容を学習しているのかを調査したが、実際に教科書に書かれた具体的な指示や記述については、触れていなかった。

そこで本稿では、学習活動の中から歌唱活動に焦点を当て、目標を達成させるために、どのような指示がなされ、どのような訓練を行うよう示しているのかを明らかにすることを目的とする。

現在のイタリアでは、指針において各学習活動についての個別の目標は示されておらず、「①さまざまな種類やスタイルの歌唱・器楽曲を、電子楽器なども用いて、個人や集団で表情豊かに演奏する、②進行中の音楽的構造や、リズム、メロディの単純な定型を利用して、歌唱曲、器楽曲を即興演奏、編曲、創作する、③音楽言語の重要な構成要素を理解し、分類する④音楽芸術において重要な作品を知り、演奏する、⑤伝統的な記号や、他の記譜のシステムを解読し、利用する、⑥自分自身の経験や考察の行程、音楽に関連した機会を活用して、音楽そのものの構造を理解する。」というように、音楽科教育における全体的な目標が示されている²。したがって、歌唱活動においてどのような能力を培うのかということについては、教科書および教師に委ねられていると言える。本稿ではイタリアにおいて実際に使用されている Bruno Mondadori 社が出版する教科書の歌唱領域について分析を行うことにより、イタリアで行われている歌唱教育の一方法を明らかにする。

2 分析する教科書の概要

本稿では、Bruno Mondadori 社が出版する *MUSICA live* (2009) の歌唱領域を分析する。本教科書は A・B の2冊がひとまとまりで販売されている。A は実技演習、B は鑑賞・理論の学習が主な内容となっている。

¹ 大野内愛「イタリアの中学校音楽科教育の現状—教科書の分析を中心に—」広島大学大学院教育学研究科修士論文、2009。

² Ministero della Pubblica Istruzione : MPI, *Indicazione per il curriculum per la scuola dell'infanzia e per il primo ciclo d'istruzione*, tecnodid, 2007.

3 教科書における歌唱領域の内容

(1) 目標

本教科書における歌唱領域の目標として、以下の3つが明記されている³。

- ・正しい発声のための基礎的な技術を知る。
- ・自分の声のコントロールの仕方を学ぶ。
- ・声による音楽を練習したり解釈したりする。

発声の基礎を学び、制御の方法を知り、その上で練習したり解釈したりする、という段階が見られる。感情を表現するための方法などについては、目標には明記されていない。

(2) 構成

- レッスン1 「楽器として」の声
- レッスン2 歌だけでなく
- レッスン3 記憶と音高
- レッスン4 ド, レ, ミの音
- レッスン5 ド, レ, ミ, ファ, ソの音
- レッスン6 スケールを歌おう
- レッスン7 フォルテやピアノで歌おう
- レッスン8 より多くの声で歌うこと
- レッスン9 音高を保つこと

歌唱領域は、レッスン1からレッスン9までが用意されている。

レッスン1では声を楽器として用いるための基礎を学習する。その上で、レッスン2では単語や文章を読むときの感情表現の方法について知る。レッスン3からは実際に楽譜を用いての、歌唱を伴った学習となる。まずレッスン3ではc4の音、レッスン4ではc4, d4, e4の3つの音、レッスン5ではc4, d4, e4, f4, g4の5つの音、レッスン6ではc4～

c5の1オクターヴ内の音を歌う練習が行われる。レッスン7ではppからffまでの強弱記号について学習し、実際に表現する。レッスン8からは、多声での合唱の演習に入る。

(3) 演習内容

レッスン1からレッスン9までの中での主な演習内容は、①呼吸・発声練習、②単語・文章を読む練習、③音高練習、④強弱練習、⑤合唱練習の5つに分類することができる。この5つについて具体的記述なども含め、その詳細を示す。

①呼吸・発声練習⁴

ここではまず、声の出るしくみについて説明している。鼻(naso)、口(bocca)、咽頭(faringe)、声帯(corde vocali)、喉頭(laringe)、気管(trachea)、気管支(bronchi)、肺(polmoni)、横隔膜(diaframma)といった、発声のための器官について図とともに紹介をし、どのように声が出るのかが記されている。

また、声の使用については、「話すこと」と「歌うこと」に分けられることが明記されている。「話すこと」については、「一般的に正確な音高を持たず、発音する単語やフレーズに応じたさまざまナリズムで話すもの」としている。それに対し、「歌うこと」については、「音高は常に明確であり、さらにリズムがはっきりしており、音の音価も決まっている」とし、「話すこと」と「歌うこと」の違いを具体的に示している。

さらに、歌唱における声の分類についても紹介されている。大人の声は男声と女声に分けられ、また12～13歳までの子どもの声を児童発声(voci bianche)と呼んでいることも明記されている。加えて、変声期についても書かれており、この時期に無理に声を出さないよう、注意を促している。

演習内容については以下のように示されている。

- ①正しい呼吸を学ぶために、次に挙げた指示のようにしてみましょう。
 - ・上半身をまっすぐにして立つ。しかし固くならないこと。
 - ・単語やフレーズ(それあなたの名前でも十分である)を、息を使い果たすまで何度も発音する。お腹に手をあて、最後の息まで感じなさい。

³ Vacchi, V., *MUSICA live*, Bruno Mondadori, 2009, p.103.

⁴ Ibid., pp.104-105.

・呼吸では肩が上がらないように注意する。そうすれば、再びお腹に入った空気を感ずることができるだろう。

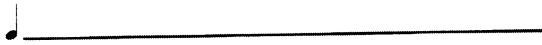
- ②呼吸のコントロールについて学びましょう。3秒吸って、ゆっくりと6秒で吐きましょう。吐いた後には肺が空っぽになっているようにし、横隔膜は、前述の練習で行ったように広げたままにしておきましょう。

【学習ガイド】

良い声を得るために、最初に呼吸を意識し、コントロールの方法について学びましょう。重要なことは、横隔膜の正しい使い方を知ることです。吸うときには、肺に空気を入れ、吐くときには、息を出すのです。正しい呼吸を学ぶためにも、この練習を何度も繰り返してください。歌うための声を使用するときにはいつも、この呼吸のシステムを思い出してください。

- ③1つの音で音高を保ちながら、1文を読んでみましょう。読み終わるまで、音高が変わらないように注意しましょう。

- ④どの音でも、あなたが歌いやすい音でよいので、無理のない声を出しましょう。息を使い果たすまで、できるだけ長く伸ばします。前述で練習したように呼吸し、同じ音でもう一度それを再開します。これを2、3回繰り返します。



- ⑤一息で、全てを同じ音になるように気遣いながら、4つの音の連なりを歌いましょう。



- ⑥仲間に音を合わせてもらったり、他の仲間が続けて出している音に合わせてたりしましょう。中断せずに、クラスの仲間全員と同じ音を出してみましょう。

- ⑦5つ音を出す中で、4つの音は同じ高さの音、1つは違う音で、つまり次の線で示したように、5つの音を歌いましょう。



ここではまず、呼吸練習の方法を紹介している。腹式呼吸を基本とし、息を吐くときには肺に入っている息は使い切り、息を吸うときには自然にお腹が膨らむように指示している。呼吸は良い声を得るための基礎であるという前提を明記し、繰り返し呼吸練習を行うよう示している。

呼吸練習の次は、音高練習に入る。しかしこの音高練習は、特に音は指定されておらず、自分の出しやすい音で練習するようになっている。音高練習は、まず1音を保つ練習が行われる。1音を伸ばす練習、4つに区切って同じ1音を出す練習、周りの音と合わせたり合わせてもらったりする練習、5つに区切って音を出す中で1つだけ違う音にする練習など、段階的に練習できるよう構成されている。

②単語・文章を読む練習⁵

ここでは、呼吸練習や音高練習が、決して歌唱のためだけのものではないということに注意を促している。声を使う職業として、「役者」「アナウンサー」「声優」を紹介し、その職業の内容も簡単に紹介している。

また、「話すこと」における表現力というものは、さまざまな音高を使い分けることにより生まれるとし、その例として、同じ文章で、肯定文の場合と疑問文の場合では音高の付け方が異なる、ということが述べられている。

演習内容は、以下のとおりである。

⁵ Ibid., pp.106-107.

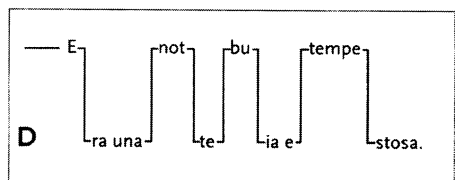
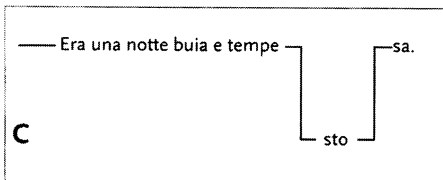
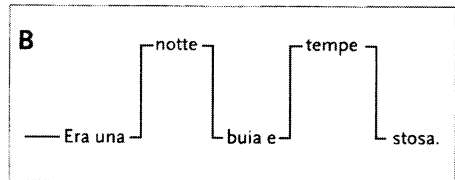
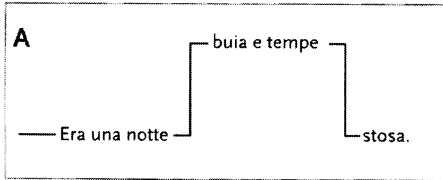
①次のフレーズを何度か読んでみましょう。グループで演習し、次の人は、前の人とは異なるように読まなければなりません。

Era una notte buia e tempestosa

②前のフレーズを、次に挙げているような表現で読んでみましょう。

- ・神秘的に ・静かに ・無邪気に ・怒って ・退屈して ・喜んで ・悲しんで ・悲劇的に
- ・めめめしながら

③①番のフレーズを書かれているように読んでみましょう。



④先生がフレーズを読んでいるのを聴いて、③番の図のどれを読んでいるのか記号で書きましょう。

1つ目=図() 2つ目=図() 3つ目=図() 4つ目=図()

⑤先生がフレーズを読んでいるのを聴いて、図に表してみましょう。

Era una notte buia e tempestosa	Era una notte buia e tempestosa	Era una notte buia e tempestosa

⑥先生が文章に音をつけたものを聴いてみましょう。フレーズの旋律に当てはまる図を、③番の図から選びましょう。

1つ目=図() 2つ目=図() 3つ目=図() 4つ目=図()

ここでは同じ文章「Era una notte buia e tempestosa.」を何度も使用し、音高が高くなる場所をさまざまに変えて、読むことと、聴くことの練習を行っている。

まずどのように読んでもよい、という自由な表現をさせた後、「怒って」「悲しんで」など、その感情になりきって読む練習をさせている。そして、次は線で示されたとおりに音高を変えて読む練習をし、さらに読まれているものを聴いて、その音高の変化はどのように線で表されるのかを考える練習を行っている。最終的には「話すこと」に使用される声ではなく、「歌うこと」に使用される声で文章が読まれているのを聴いて、その音高の変化を感じとる練習へと段階的に進んでいく。

③音高練習⁶

ここからは、「歌うこと」に使用する声に限定して練習を行うようになっている。

⁶ Ibid., pp.107-113.

まず歌を正しく歌うための要件として、聴いた音を正しく記憶し、認識し、さらに忠実に再現することが必要である、と明記している。そして、歌を歌うためには、他の楽器を訓練するように、単音から少しずつ訓練することが必要である、とも記されている。

ここでの演習は、楽曲を用いて行われるものと、ソルフェージュ的に行われるものの2つに分けられている。楽曲を用いて行われるものでは、まずc4の音のみの曲が提示され、歌唱練習をするよう示されている。1つの音高を保つことは簡単なことのように思われるが、実は非常に集中力を要するのである、という注意書きもなされている。そして次にc4・d4・e4の3音が使用されている曲、c4・d4・e4・f4・g4の5音が使用されている曲、最後にc4・d4・e4・f4・g4・a4・h4・c5の8音が使用されている曲が掲載されており、徐々に音域が広がっている。

ソルフェージュ的に行われる演習内容は以下のとおりである。

①次の音の並びを聴き、歌いましょう。

1) ドレド 2) ドレミレド 3) ドレミド 4) ドミレド 5) ドレミドレ 6) レドレミド

②先生が演奏するドレミファソを使用した音の並びを聴き、その並びを階名で書きましょう。

1 () 2 () 3 ()
4 () 5 () 6 ()

③次の音の並びから1つ選び、歌いましょう。またあなたの仲間が歌うときは、その音の並びを以下から選びましょう。

1 (ドレミファソ) 2 (ソファミレド) 3 (ドレミファミ)
4 (ソファミレミ) 5 (ドミソミド) 6 (ソミドミソ)

④次の音の並びを聴き、歌いましょう。

1 (ドレミファソ) 2 (ファソラシド) 3 (ドシラソラ) 4 (ソファミレド)

⑤次の音の並びを階名で歌いましょう。

The image shows five musical staves labeled a) through e). Each staff contains a sequence of notes on a treble clef staff. a) and b) are on a single staff with a double bar line in the middle. c) and d) are on a single staff with a double bar line in the middle. e) is on a single staff. The notes represent the sequences described in the text above.

ここでは、いきなり楽譜から入るのではなく、階名で歌唱されたものを聴いたり、歌ったりすることから音高の訓練を始めている。そして最終的には楽譜に書かれたものを歌うよう指示している。

④強弱練習⁷

まず前提として、人間の声は、機械のように同じ強さを常に保つことはできないということが記されている。その上で、歌唱表現を豊かにするために、強弱の変化は効果的であると述べている。ここで使用される強弱記号は、「*pp*, *p*, *mp*, *mf*, *f*, *ff*」の6つである。

ここでの演習も、音高練習のように、楽曲を用いて行われるものと、ソルフェージュ的に行われるものの2つに分けられている。

楽曲を用いて行われるものでは、c4からb4までの音域の楽曲で、*p*から*f*までクレシェンドをしたり、*f*から*p*までデミヌエンドをしたりして、強弱表現の練習を行えるようになっている。ここでは音高に注意するよりも、強弱に関する指示に注意を向けて表現することが求められている。

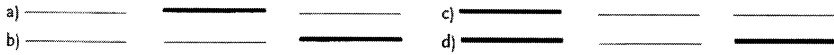
またソルフェージュ的に行われる練習の内容は以下のとおりである。

⁷ Ibid., pp.114-115.

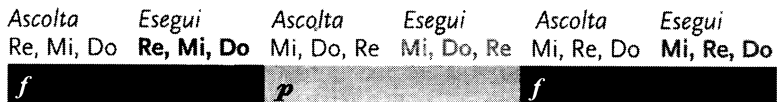
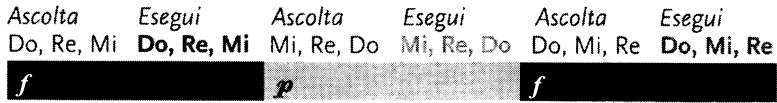
①同じ高さで、同じ強さの音を3回歌いましょう。



②同じ高さの音で、しかし次の図に示されたように強さを変えて3回歌いましょう。



③次に書かれている強さで、音の並びをまず聴き、そして歌いましょう。



まず強弱を線の太さで示し、視覚的に理解させながら強弱表現をさせている。強弱に集中させるため、特に音高は指定していない。その上で、実際に *p* や *f* といった記号を用いて、強弱表現をさせている。ここでは $c4 \cdot d4 \cdot e4$ の音高を使用しながら強弱をつけて歌うよう指示している。また教師が指示された強さで歌うのを聴いてから、その強さで模倣するようになっている。

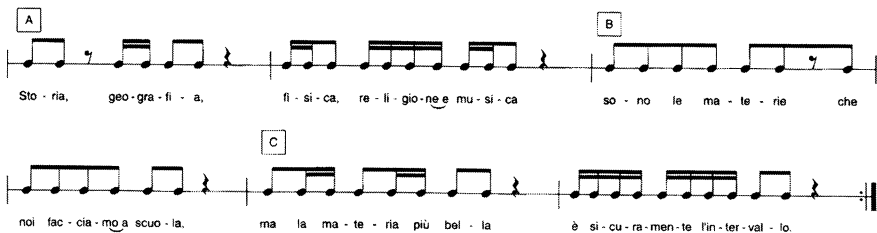
⑤合唱練習⁸

まず初めに、仲間と共に歌うことは幸せなことであると述べられており、さらに仲間たちと異なるパートに分かれてハーモニーをつくることはより大きな喜び得られる、と明記している。

多声での歌唱を成功させるためにまず必要なことは、リズム感を自立させることであるとし、その後、音高を保つことが大切だと示している。音高を保つことが難しいときには、自分の耳をふさいでしまうことにより、他の音から遮断し、自分の音に集中することも1つも方法として紹介されている。

リズム感を自立させるための演習内容は以下のとおりである。

①提示された練習はリズムカノンです。1つの音で話すようにして練習することができます。多数の声で、指示されたタイミングで始めます。



②さまざまなリズムモチーフを演奏しましょう。次の指示を参照してください。

- a) 1グループずつ、楽譜に示されたタイミングで入る。
- b) 先生が指示した回数繰り返したあとで、初めの小節のはじめの拍で終える。
- c) グループのリーダーを定めることで、成功に寄与する。

⁸ Ibid., pp.116-119.

まず音高を定めない練習を行う。リズムカノンからはじまり、リズムアンサンブルへと発展する。さらに多声の場合は特に能力の高いリーダーを定めることが成功の鍵であるとも記されている。次に音高を保ちながら多声で歌う演習は以下のとおりである。

①クラスを2つのグループにわけます。1つのグループは、ソの音高を出し、また、2つ目のグループはドの音高を出します。グループリーダーは2つのグループの音を出すタイミングを決めます。練習の例を以下に提示します。

②クラスを3つのグループに分け、ドレミの3つの音に分けて歌います。タイミングはリーダーが決めます。練習の例を以下に提示します。

③3つのグループに分け、以下に指示したものを練習してみましょう。

まず、クラスを2～3つのグループに分け、1グループにつき1つの音を定め、自分の音を他の音と共に出させるという練習を行う。その上で、各グループとも単純な音の並びを同時に歌い、ハーモニーを作る練習を行っている。

その他にも、楽曲を使用した訓練が行われる。掲載されている楽曲は9曲で、2～3声で合唱をするもの、4声でのカノンなどがある。

4 考察

まず歌唱領域には3つの明確な目標が示されており、そのための段階的な訓練が行われる。

歌唱領域の演習内容は、①呼吸・発声練習、②単語・文章を読む練習、③音高練習、④強弱練習、⑤合唱練習の5つに分類することができた。

まずは基本の呼吸および発声練習が行われるが、この内容については特記すべき事項は見当たらない。歌うときの姿勢や、腹式呼吸の方法など、基本的な内容が明記されていた。音高をつけた練習もここから始まっているが、特にどの音高にすべきかは明示されておらず、自分の歌いやすい音高でよい、とされている。これは、音高を意識することよりも、呼吸の方法や姿勢に意識を集中させることが目的であるからだと考えられる。さらに初めの段階で、1つの音高を保つこと、周りとの音を合わせることで、視覚的に音高を理解することが訓練される。音高はずれは、音高弁別能力や、音高再生能力が関係しているとされているが、子どもが音高はずれになることを阻止するためにも、こうした訓練は効果的であると考えられる。

次に単語や文章を読む練習が行われる。普段話しているときにも、人は感情を表現するために、自然に音高に差をつけて言葉を発していることに気付かせている。またその音高変化を図示することにより、音高の高低がわかりやすくなっている。そのように音高変化を図示することは、楽譜を使用する前段階としても意味があると考えられる。

そしてここでやっと音高練習に入る。特記すべき内容としては、単音(c4)からだんだんと音域が広がっていることである。日本においては、実際のわらべうたなどを用いて楽曲から訓練していくことが一般的であるが、ここでは、歌唱においても、他の楽器の訓練と同じように、単音から徐々に訓練することが必要であると示されている。実際に単音で歌う楽曲も掲載されており、段階的な学習に重点を置いていることが読み取れる。ここで初めて明確な音高が示されているが、すぐに楽譜には入らず、まず階名で音高を表現することから訓練している。また自分が歌うだけでなく、教師や他の仲間が歌ったものの階名も書いたり選んだりできるような、聴音の入門ともいえる訓練がなされている。

次は強弱をつける練習である。ここでもやはり、いきなり強弱記号を学ぶのではなく、まず細い線は弱い音、太い線は強い音、というように、強弱を図示している。まずは視覚的に強弱を認識させ、表現させていることも特記すべき事項であろう。その上で、実際の強弱記号の表現を訓練する。このレッスンで音高を指定していないのは、強弱の表現に意識を集中させるためであると考えられる。

最後に合唱の練習である。ここでも段階的に学習できるよう構成されている。まずはリズムカノン、そしてリズムアンサンブルを行い、その上で音高をつけたカノンやアンサンブルを行っている。

歌唱領域の内容を概観すると、2つの特徴を見出すことができた。1つ目は、教科書にも記述されていたとおり、まるで何かの楽器の訓練をするかのような段階的な訓練が行われていることである。日本でも姿勢や呼吸の練習は基礎的な内容として、その重要性が認識されているが、本教科書では単音でのロングトーンのような練習から始まっていることは、特記すべき内容であると言える。2つ目は、すぐに楽譜での学習に入らず、まず高さや強さを視覚的に認識できるよう図示されていることである。実際の教育現場において、音楽が苦手な生徒は、楽譜を用いての訓練に拒否反応を示す場合も多い。本教科書は、そうした生徒にも十分な配慮がなされていると考える。

5 おわりに

イタリアはオペラ誕生の地でもある。本稿では、そのような国での歌唱教育がどのように行われているのか探るため、イタリアの中学校音楽科教科書 *MUSICA live* における歌唱領域に焦点を当て、その訓練内容を概観した。実際の教育現場においては、歌唱や器楽といった、実技を伴う教育を、どのように行っていくべきなのか、迷うことも多い。したがって、イタリアの音楽科教科書 *MUSICA live* に見られる指導法は、今後の音楽科教育に何らかの示唆を与えてくれるものではないかと考える。

参考文献

- ・ Ministero della Pubblica Istruzione : MPI, *Indicazione per il curricolo per la scuola dell'infanzia e per il primo ciclo d'istruzione*, tecnodid, 2007.
- ・ 大野内愛「イタリアの中学校音楽科教育の現状－教科書の分析を中心に－」広島大学大学院教育学研

究科修士論文, 2009.

・ Vacchi, V., *MUSICA live*, Bruno Mondadori, 2009.